



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	古田悦造先生のご退職にあたって（古田悦造先生を送る）（fulltext）
Author(s)	椿,真智子
Citation	学芸地理(71): 11-12
Issue Date	2016-02-18
URL	http://hdl.handle.net/2309/145209
Publisher	東京学芸大学地理学会
Rights	

古田悦造先生のご退職にあたって

椿 真智子*

古田悦造先生は、2016年3月をもって東京学芸大学を退職されることとなりました。1980年4月のご着任以来、36年の長きにわたり、私たちならびに地理学分野(研究室)を支えてくださったことにあらためて感謝申し上げます。古田先生は本学大学院修士課程の卒業生でもあり、在学期間を含めれば、40年弱にわたり東京学芸大学にて研究者および教育者として歩んでこられたこととなります。私たち教員や多くの学生・院生が古田先生から与えられた学問的刺激は多大なものであり、また学問以外のご指導も常に刺激的でした。本学地理学分野を語る上で、これほど独自の個性と魅力にあふれた先生もおられないのではないのでしょうか。なお先生は、1992年から学部教育組織としては国際理解教育課程日本研究教室に所属され、そちらでも多くの優れた学生・院生を育ててこられました。

思い返せば私の古田先生との出会いは、院生として右も左もわからない時分で、既に古田先生は学芸大に勤務されていました。同じ大学院の大先輩、まさに雲の上の人でした。お目にかかる機会が少ない分、印象は強烈で、まともな研究をしたことのない自分にとり、真の研究者とはこのような方を言うのか、と感じさせる存

在でした。学芸大に職を得ることが決まった際も真っ先に頭に浮かんだのは古田先生であり、同じ職場で働かせていただける喜び以上に緊張感が漲ったものでした。

学芸大での日々が始まると、古田先生からは何度となく、助手としての心構えや経験、苦労話を聞かせていただきました。古田先生の他人に対する配慮や意外なほどの几帳面ぶりに驚かされることもしばしばでした。こうした几帳面さと大胆な破天荒ぶりの同居は、古田先生の魅力の一つに違いありません。同時に、学問的な問いやアドバイスもしばしばくださり、私にとっては、マンネリ化しがちな日常における極めて貴重な存在であり続けました。

古田先生のご専門は歴史地理学で、研究の集大成の一つは、魚肥流通を指標として、地域論の観点から近世～近代の日本の地域構造の変質過程を論じられたものです。そのほかの具体的な研究業績は本誌の経歴等にゆずりますが、先生の歴史地理学にかける思いは人一倍でした。先生は、師のお一人である菊地利夫先生の意思を継がれ、歴史地理学の隆盛と学問的發展を一貫して追及しておられたように思います。その実現に対する責任感は生半可なものではありま

* 東京学芸大学地理学分野(主任)

せんでした。古田先生の地域に根差した実証主義的な歴史地理学の探求は、歴史地誌学の提唱へもつながりました。動態地誌学に時間軸を組み込んだ歴史地誌学の重要性を提起され、地歴科教育への提言も多くなされました。そうした教育への熱心なアプローチは、大学の授業で、毎年多くの巡検を実践されていたことにも示されています。市民むけ公開講座でも、古田先生の巡検を楽しみに毎回遠隔地から訪れる受講生がおられました。フィールドに根差した先生の地理学的関心は、学生時代、自転車で日本を一周されたとのご経験に既に十分伺えるものであり、フィールドにこだわる当地理学分野の良き伝統を力強く支えていただきました。古田先生の薫陶を受けた多くの卒業生が、地理の教員や研究者として活躍されているのも、現場や史料から徹底的に考えることの厳しさ・楽しさを実

践された先生のご指導の賜物だと思います。

古田先生は、学閥をこえた地理学界の重鎮や碩学とのさまざまな交流や思い出についてもよく語って下さいました。古田先生ならではのコミュニケーション・スタイルは、学界においてもフィールドにおいても遺憾なく発揮されていたようです。そのエネルギーは海外調査や、とりわけ韓国の研究者や留学生との熱い交流にもあられ、いつの間にかハングルを習得されていたのには驚かされました。

学問への飽くなき情熱と誰にも真似できない個性とをいかんなく発揮されてきた古田先生との思い出は、私たちそれぞれの記憶に刻みつけられ、今後も大きな意味を与え続けてくれるに違いありません。古田先生のますますのご健勝とご活躍をお祈りしつつ、送別のことばとさせていただきます。